



青森県偕行会

「忠霊塔」周辺清掃奉仕

事務局長 稲村 孝司 陸自75

青森県偕行会は、昨年を引き続き、ねぶたまつりの「なぬかび」にあたる8月7日、弘前市西茂森町の禅林街長勝寺敷地内に位置する「忠霊塔」周辺の清掃奉仕を、現職自衛官41名、隊友会員及び市民ボランティアら約70名と協働で行った。折からの猛暑で、朝からぐんぐんと気温が上がり30度に迫る炎天下、草刈り機21台が「ウイーン」とけたたましい音をたてて作業が進んだ。

作業開始予定の8時半には、取材依頼をしていた地元新聞社の東奥日報社と陸奥新報社の記者が到着した。陸奥新報社は昨年にも依頼に応じて記事が報道された。東奥日報社は、青森県の地方紙であり、これまで取材依頼に応じたことがなかったもので、ベテランらしい記者の来場にも、驚くと共に取材対応に緊張した。準備した資料を配付して「忠霊塔」の建設

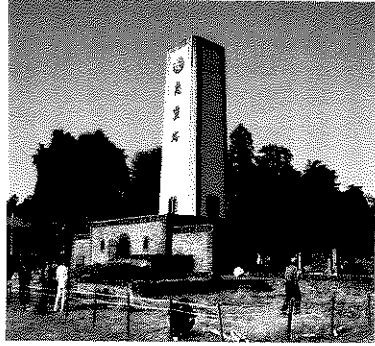
経緯などを説明した。資料は、偕行社が平成26年9月に発行した『陸軍墓地』の「第38回 青森県弘前陸軍墓地」、「偕行」(令和2年10月号「つどい」)の「青森県偕行会 忠霊塔周辺清掃奉仕」の記事などをコピーした。

作業の間には、長勝寺須藤龍哉住職による慰霊の読経が、忠霊塔1階中央の祭壇前で行われた。須藤住職は、塔を管理する「宗教法人弘前仏舎利塔」の代表も務めている。

東奥日報社は、二日間連続記事として、一日目は「記憶の遺産 軍都弘前の今 忠霊塔の管理 代替わりで曲がり角」のタイトルで5段31行の記事を、忠霊塔をバックに草刈りに汗を流す会員の写真入りで報道した。二日目は「記憶の遺産 軍都弘前の今 第8師団の建築物老朽化進む取り壊し」のタイトルで5段31行の記事を、柴田学園高校校内に残る第8師団関係の建造物と山田野演習場跡に残る兵舎内部の写真2枚入りで報道した。本文では、弘前市内やその周辺には、陸軍第8師団関連の建築物が現在も点在、倉庫などに転用されながら、その姿が軍都だった当時の街の記憶をとどめているが、老朽化による取り壊しで急速に消失。地域史の関係者の間では調査や保存の動きがみられる。と書かれ「旧弘前偕行社」についても、師団の将校の社交場などとして使われていた国重要文化財

が2019年度までに修復された。と紹介された。末尾には、「ここ10数年の間に、軍隊や慰霊に関する研究が進んだことは大いに意義がある」と締めくくられ、陸軍の名誉回復が期待された。

弘前市を中心とした津軽地方のローカル紙「陸奥新報」は、昨年は「忠霊塔周



忠霊塔の清掃



弘前陸軍墓地

辺きれいに 会員ら草刈りに汗」とのタイトルで報道していた。今年も、東奥日報社が草刈り状況などを詳しく報道したので、報道部次長である記者が、どんな内容で報道してくれるのか楽しみにしていた。同社は8月15日以降、「語り継ぐ戦後76年」として、「父の姿戻った遺髪だけ」「青森空襲を彫刻刀に込め」「身重の体で逃避行」「旧山田野兵舎教材に」「次世代へ記憶の継承」の記事を1面トップで7段39行の記事を連日報道していた。

い出させた。その内容は、偕行社発行の『陸軍墓地』を要約したような「忠霊塔の創設と変遷」「終戦後の忠霊塔」などが記された後に、今年も自衛隊OBによる草刈りの様子と、関係者の言として「我々はこうして歴史を語り、大切に守っていきたい」が紹介され、記者の「戦争の傷跡が身近にあることを知り、向き合い、考えることを忘れてはならない」と締め括られていた。

清掃終了後、英霊に対し黙祷を捧げた。次いで、忠霊塔右側の陸軍墓地に供花、供酒し焼香拝礼した。